大地の園

第四部　知と愛の門

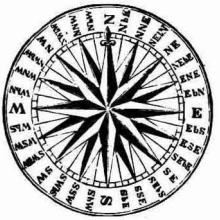
打木村治

大地の園

第四部　知と愛の門

打木村治

偕成社



偕成社の創作文学

大　地　の　園
第四部　知と愛の門

NDC 913　偕成社　316 p.　21 cm　1978 年

1978 年 7 月　初版第 1 刷

著　者　打木村治（うちきむらじ）
発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5
TEL(03) 260－3221（代）〒162
振替　東京 5－1352 番
本文印刷　新興印刷製本株式会社
多色印刷　小宮山印刷株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393－720090－0904
© 打木村治　武部本一郎　1978

Printed in Japan

亡(な)き母に捧(ささ)げる

知と愛の門／もくじ

第一章　中学劇場 ―― 6

虫の知らせ／若いパワーの激突／よっぱらった南京キンギョ／すみれたんぽぽお茶の味／かつらの〈イライラ吹っとばし論〉／山！　天覧山……

第二章　奇跡の窓 ―― 55

うその時間／この美しいデイト／微笑のみずうみ

第三章　象徴の花 ―― 91

ウマさんとマンちゃん／ハンケチの譜／花にロづけ

第四章　人生まんだら ―― 116

成長の足音／愛の言霊／波紋アラカルト／愛は生きている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　人間雑々 ―――― 150

初恋の抒情詩／さもあらばあれ／しのびよるわな／男は堂々／武士のむすめ

第六章　彷徨の季節 ―――― 196

胸に虹が……／トルストイ／空のドラマ／神経衰弱／にぎやかな相談／二度めの奇跡

第七章　たまゆらの記 ―――― 249

コケコッコー／太陽行軍／ダイヤモンドの時間／せみしぐれの中で／ひたすらの火／秘密の願望に花が咲く／愛の埋葬

あとがき ―――― 310

『知と愛の門』について＝福田清人 ―― 313

作者・打木（うちき）　村治（むらじ）

1904年大阪府に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。大蔵省官吏となるが退職。同人誌「作家群」を創刊主宰し，以後作家生活に入る。現在，日本文芸家協会・日本ペンクラブ・日本児童文芸家協会・日本農民文学会会員。主な著書に「春の門」「生きている山脈」「天の園」全6巻（芸術選奨文部大臣賞）などがある。　住所／飯能市大字中居旭原13－3

画家・武部（たけべ）　本一郎（もといちろう）

1914年大阪府に生まれる。戦後上京し，絵本，児童書を中心に幅広く活躍する。けんらんで繊細な画風をもって知られ，作品には「かわいそうなぞう」「小さな心の旅」「帰らぬオオワシ」等多数がある。出版美術家協会会員。
住所／神奈川県横須賀市湘南鷹取2－21－7

大地の園

第四部　知と愛の門

打木　村治

第一章　中学劇場

虫の知らせ

一年に三度ある休暇のうちで、春休みぐらいあっけなくおわる休暇はない。

なにもかも四月から新しくなるのだから、することがなにもない。春だからからだはだるい。それを三学期の試験のせいにして、ごろっちゃらだらけているうちに、あっけなく春休みはおわる、といったあんばいだ。

それだけに四月からはじまる新学期には、だれしも新鮮な希望と期待を持つ……持たされる——おかしな休暇だ。

さて、そんな春休みにきょうからはいった。ところで保は、例により、いとこの馬橋鉄忠と鈴見佐平さんから、チクリチクリとやられた——成績のことでだ。

これは毎学期のことで、もう保はなれこになって

いるせいか、そんなチクリはあまり痛く感じない。だが返事だけはよいのだ。
「はい！」
　こののんきというか、どこかたりないらしいとでもいうか、とにかく保の話にならないたいへいらくな顔つきに、ふたりの先輩はあきれている。その場に保の母のかつらもいるのだ。かの女もかの女で、唐子時代とちっとも変わらず、あいかわらずのおっとりした叔母さんで、お茶のめんどうなどみてやっている。
「このおだんご……川越名物よ。みなさんの進級祝いだって、さっき米屋からとどいたの。さあおあがり。」
　まずはこれで、たのしいお茶のつどいとなるのであった。
「はやいものだわね……」と、つづけてかつらはいう。しみじみとだった。「あなたたち、もう最上級の五年生だものね。保が一年生で、あなたたちが三年生だったあのころが、ついきのうみたいだものね……おかげで保も三年生になりました――ありがとう！」
「おい！」と鉄忠は、それにはかまわず、きびしい目を保にむけた。「おまえ、しばらく読書をやめて、数学に力を入れろ！　おまえはもう三年生だぞ……受験の心がまえだけはしておけ――ぼくたちでさえ、あわてだしているんだから。」
「……！」
　これには保は、返答にこまった。だまって下をむいた。
「ありがとよ、鉄忠」と、保に代わってかつらがこたえた。「あんたのいまいったこと……ありがと

う——叔母さんもよく考えさせますよ。」
「おせっかいかもしれないけど……叔母さん、こいつはなんとしてでも大学まで……ね、叔母さん——要するに、もてあますなあ、タモ公ってヤロウは！　なあ鈴見、おまえもそう思わねえか？」
「あのな、馬橋！」と鈴見はいった。「おそらくタモちゃんは、読書はやめねえぞ……読書バカになりたてのホヤホヤだからな。それに、ふっつりやめさせるのも考えもんだ。おまえのいまの話は、大いに賛成だけんど……」
「……すみません」とかつらはいった。「そんなに心配していただいて——わたしが、もっとしっかりすればいいのだけど……」
「叔母さんじゃあない……」と鉄忠がいった。「保ですよ——おい、おめえ、しっかりしろ！」
「はい！」
「あしたですね、あなたたちが帰省するのは？」とかつらは、かの女一流の調子で話題を変えようとした。「さびしくなるな……いく日かのあいだ——おや、名物だんごがまだ四本のこってる……」
きょうのこの頼もしい〈会議〉は、鉄忠たちのへやでだった。　このへやの名まえは〈臥竜塾〉——かつらのつけた名まえである。
「ええと……」と、かつらはまだつづける。「どなたか見えるんだったわね？　もうじきでしょね？」
「あ、そうだ」と鉄忠がいった。「清水東平ですよ、叔母さん——あいつ、遅刻したな……もうすぐくるでしょう。」
「あーら、清水さんなの！　まあ……！　ではこのおだんご、清水さんにとっておきましょうよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

清水は親戚の綾瀬家をでて、いまは寄宿舎にはいっている。この臥竜塾にはときどき顔を見せにくる。学校で柔道助手をやっている。柔道助手は本来四年生からとなっているが、抜群の素質がみとめられ、三年生のときとくべつに助手を命じられた。これは鉄忠も同じで、当時三年生で柔道助手というのは、このふたりだけだった。それが四年生になると、たちまちふたりは実力初段とみとめられたが、いまのところはまだ茶帯で一級にとどまっている。四月からは五年生だから、すぐにもあこがれの黒帯がもらえるだろう。

鉄忠と清水は親友であり、同時にライバル同志でもあった。そこへ保というなまじ柔道ずきのやっかい者がわりこんできた。鉄忠は、保に素質のあることはみとめている。だがしかし、保の柔道は鉄忠のいうところの〈チョコマカ流〉である。このくせをなおしてやらないと惜しい、とかれは考えた——とかく保というやつは、鉄忠がいとこであることに気をゆるして、わがままをだすくせがないとはいえぬやつだ。そこを考えた鉄忠は、親友の清水東平に保を託した。清水はきびしい男だ。ここ一年あまり、かれは保をしごきにしごいた。柔道ばかりでなく、例の同志会の委員もかれはやっているので、同志会でも保は世話になっている。そんなわけで、清水が臥竜塾にくるようになってからは、かつらと清水はいっそう遠慮なく話ができる仲になっていた。

その清水東平が、やあ遅刻した、すまん、と頭をかきながら臥竜塾の縁側にあらわれた。かれは家が飯能町なので、いま飯能に帰省するとちゅうだ——川越駅で汽車を待つ間に寄るぞ、といったわけの約束だったのである。

おまえのために、わざわざ叔母さんがとっといてくれただんごだぞ、という鉄忠の説明に、清水

は感激して、見ているあいだに四本ペロリと平らげた。平らげてからはじめてかつらに礼をいった。
「わざわざとっといてくれて、どうもおばさんありがとう。」
「わざわざではありませんのよ……いまね、保がこのふたりから、もうちょっと勉強しろってアブラをしぼられたところですの。よほどクスリがきいたとみえて、だいぶしんみょうでしてね、いつものように欲ばらなかった、そのためですわ——まあ、いつも清水さんにお世話になるので、そのお礼に保がとっておいたっていうことにしておきましょうよ。」
「はあ、そういうことになるのですか……では保くんにお礼をいわなくちゃあ——おい河北、うまかったぞ。」
「……はい。」
かつらは、つくづくと三人の保の先輩をながめた——いい知れぬ感動が胸をゆさぶった。
(ありがたいわ……こんなすばらしい先輩にめぐまれて、ほんとに保はしあわせだ!)
それからのいっとき……なんといったらよいか……にぎやかで、まじめで、さわやかで、おもしろくて、いつまでも見とれてしまう風景がかつらの目の前で展開された——こんなすばらしいつどいは、いつまでもおわらせたくない、とかつらは思うのだった。
そんなかの女の耳に、なんともけっこうでおそれいったことばが、ふと気がつくと、やたらとはいってくるのであるった。
(おやまあ……!)とかの女は、びっくりしたりあきれたりだった——(いつのまに、そんな名まえがわたしについていたのかしら……ほんとにこの連中ったら!)

とかの女は、おかしくもあり胸が熱くもなるのだった。

（……いいわよ。うれしいわよ。どうせこっちは、はじめからそのつもりだったんだから――おそれいりました。）

かの女は、こっそりクスクスわらいをした。連中のディスカッションは、ますますのっている。それを保はとっておきのしんみょうさで、目をかがやかして見学している。その目のかがやきの中に、かつらは保が日ごとに成長していく姿を見るような気がした。

時間がきたのだろう……三人は同時にさっと立ちあがった。こんなのもおどろきだった。清水がまっさきに縁側でくつをはきおわると、〈キヲツケ〉の姿勢でかつらにあいさつをした。駅まで送ってきます、と鈴見がいった。のっそりさきに歩きだしたのが鉄忠で、保は清水の荷物を一つ持たされて、清水にくっついていく。その四人のうしろ姿を、かつらは路地のおくから見送った。感動的な風景であった。

ひとまずかの女は臥竜塾にひっこんだ。そのへんのごちゃごちゃをかたづけた。

（……やれやれ――〈臥竜塾のおばさん〉とはうまくつけたもんだ。さて、うちへ帰らなくちゃあ……今夜は家で進級祝いをするはずだっけ。）

家へ帰るのにめんどうはなかった。三軒長屋の庭つづきのことだ。庭がしぜんと通路になっている。保たちの往復で、しょっちゅう縁先を通られるまん中の日本橋さんでは、さぞめいわくなことだろうと思うのだけれど、どうもしかたがない。かつらは、通るたびに「すみません」と声をかけているが、書生たちは、そんな気のきいたことはぬきにしている。さいわい日本橋さんは、夫婦そ

ろって気のいい人で、それでたすかっている。もう五十歳近い主人は、駅に倉庫を持つ運送店につとめているが、ふだんはその倉庫の番人をしている。正直者でそのうえ力持ちでないと、番人にはさせないのだそうである。

かつらは、今夜のお祝いを、連中のいちばん好物のカレーライスでいこう、とさっそくその準備にとりかかった。

（そうだわ……おいしくこしらえて、おとなりの日本橋さんへもすこしおわけしよう。）

こんなことを考えただけでも、きょうのかの女は、自分でもおかしくなるくらいしあわせであった。

清水を送りにいった三人の帰りがだいぶおくれている。のんきな人たちだ……送ったあと散歩でもしているのだろう、とかの女は、そんなところで気をまぎらせた。

（それにしてもおそいなあ……おかしいぞ……）

と、やがてかの女の気もめは、だんだんわるいほうへとかたむきだした——こんなのを虫の知らせというのかもしれない。

（まあ心配ないわ、あの豪傑ふたりと保と三人だもの……なんてまあ、わたしったらどこまでバカなんだろう。）

とかの女は、自分の苦労性をぐちりながら、顔をわきにむけて、玉ねぎきざみに気をそらした——（やれやれ目が痛い。）

若いパワーの激突

ところでこっちは駅に着いた四人だが、連中は連中で、へんなゆきがかりから、心にもない大騒動をまきおこすことになってしまったのだった——なにしろ天下の〈駅頭〉ときている。なんとしても場所がわるい。不運だった。

発車までには、時間がたっぷりあった。駅で時間待ちもまたたのしからずや、などとしゃれたことを鈴見がいうものだから、連中はその気になってでてきたわけである。

さしづめ駅のさくらの木の下のベンチに陣取った。まず清水東平が便所へいった。待てどくらせど清水がもどってこない。

「あいつ、なげえなあ……」と鉄忠がつぶやいた。「腹でもわるくしたのかな。」

「まさか」と鈴見がいった。「寄宿舎で、便所へいくのを省略してきたんだろ……あいつのことだから。」

「便所が省略できるかなあ……?」と保がいった。「……さっきのだんごじゃあねえだろうか。」

「バカ。自分の腹を考えてみろ……おれたち、同じものを食ったんだぞ、保。」

「あ、そうか……」

「あのなタモちゃん、寄宿舎は、きょう帰省する連中で、便所ははやい者勝ちなんだ。行列だってする。そんなの、清水ってやつはだいきらいなんだ。それでいま、あそこでゆうゆうとやってる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com